

月明を翔く[孚]

下村良之介展

市制40周年記念

4.26[木]—5.13[日]

開館時間 9:00~16:30 初日10:00 休館日 5.1[日] 5.7[日]

刈谷市美術館 刈谷市住吉町4丁目5番地 TEL.(0566)23-1636
JR東海・名鉄「刈谷駅」南口下車徒歩7分

主催 刈谷市 刈谷市教育委員会

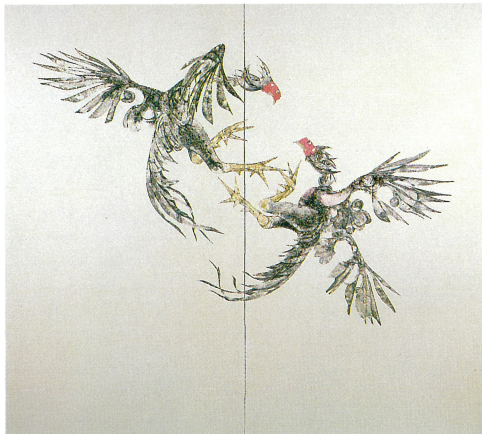
後援 愛知県教育委員会

中日新聞社

入場料 無料

市制40周年記念

下村良之介展



闘鶏屏風(勾) 1978 (昭和53)



化石の張翼 1970 (昭和45)



還暦の自画像 1983 (昭和58)

従来の日本画を越えた独自の表現方法によって、既成概念を打ち破る新しい造形を目指す、下村良之介氏の本格的な回顧展を開催します。

下村氏は大正12年(1923)大阪に生まれ、昭和18年(1943)京都市立絵画専門学校(現・京都市立芸術大学)を卒業。戦後、依然として、現実を直視しない既成日本画壇に疑問を抱き、昭和23年(1948)京都絵画出身の若手日本画家らとともに、パンリアル美術協会の結成に参加します。以後、今日まで同協会の中心的作家として活動しています。また、その他にも、ピッツバーグ国際現代絵画彫刻展、サンパウロ・ビエンナーレ展などに出品して国際的評価を得、また日本国際美術展、現代日本美術展にも出品し、幅広く活躍しています。

その意欲的な制作活動は、終戦とともに開始され、「膠彩絵画の可能性を拡充しよう…」と荒廃しきった戦争直後の社会と直結した題材をもって、パンリアル展に発表します。パンリアル結成の4年目頃から、主題が鳥にしぼられます。「題材は作家の主観によって初めて価値が生ずるもの。絵にすれば宝石でも瓦礫でも同じ価値ではなかろうか。」と考えるようになり、「生来、好きだった鳥を描き始めたら、いつの間にか鳥に魅かれていた。」下村氏の描く鳥の絵は、作家自身の鋭い感受性と結びついた意識の底にひそむ世界が写し出され、カタチを越えた実在感を持ったものになります。

初期には、陰影による表現に疑問を抱き、抽象的な表現に移行し、線が主体の作品を発表しました。その後、紙粘土によるレリーフ様の作品を制作し、既成の日本画の範疇を越えた独自の画風を展開します。やがて、「軍鶏屏風」で野性味ある緊張度の高い鳥を描き、「断層」シリーズを経て、さらに「闘鶏屏風」シリーズで、気迫あるはりつめた緊張感をもつ空間と密度が表現されます。そして近年からの、「月明を翔く」シリーズで、相対する満月と鳥の壮絶なドラマが開始されています。

他に版画、やけもの(焼物)も制作し、その作品は軽妙で個性的な現代感覚にあふれています。

本展は、その代表作品40数点と、版画、やけもの(焼物)、自画像を含む80余点による想像力豊かな下村芸術の真髄を紹介します。



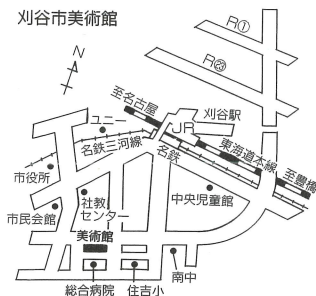
池畔 1957 (昭和32) 京都市美術館蔵



穴鼻(ギョウ) 1986 (昭和61)



シルクハト 1988 (昭和63)



刈谷市住吉町4丁目5番地 TEL.(0586)23-1636
JR東海・名鉄「刈谷駅」南口下車徒歩7分